

授業実践報告：プロジェクトワークの効用 —大学院入学前日本語予備教育生の場合—

池田 英喜

(iked@isc.niigata-u.ac.jp)

0. はじめに
1. プロジェクトワークとは？
2. 目的
3. 実際の授業の流れと目的との関連性
 - 3.1. 第1段階(第1週～第4週)
 - 3.2. 第2段階(第5週～第8週)
 - 3.3. 第3段階(第9週～第15週)
 - 3.3.1. アンケートシート
 - 3.3.2. グラフ作成
 - 3.3.3. スライド作成
 - 3.3.4. 発表原稿作成
 - 3.3.5. 発表
4. 今後の課題
5. おわりに

0. はじめに

新潟大学では大学院入学前日本語予備教育生(以下予備教育生)に対して、留学生センター発足以来、プロジェクトワークを修了要件として課している。本稿では1999年10月期から2000年10月期までの、私が直接関わった3期分の学生のプロジェクトワークの効用について報告する。

1. プロジェクトワークとは？

『「プロジェクトワーク」とは、学習者が自分たちで話し合っ て計画をたて、実際に教室の外で日本語を使ってインタビューや資料集め、情報集めなどの作業を行い、作業の結果をもちよって一つの制作品(報告書、発表、ビデオなど)にまとめる学習活動である』(1998 田中・猪崎・工藤)。ただし本稿でいうプロジェクトワークは、本学留学生センターで予備教育生に対して行われる授業科目を指し、一般にいわれるプロジェクトワークそのものには限らないことをあらかじめ断っておく。

本学で行われるプロジェクトワークの実施手順は以下のとおりである。なお、

本学の授業は昨年度から Semester 制に移行したため、実際に学生に指導ができるのは 15 週間である。

第 1 段階(第 1 週～第 4 週) : コンピューターに触れる

第 2 段階(第 5 週～第 8 週) : コンピューターで遊ぶ

第 3 段階(第 9 週～第 15 週) : コンピューターを活用する

一見するとコンピューターの科目かと思われそうだが、予備教育生に日本語でのパソコン操作に慣れさせるというのも科目の目標の一つなので、このような構成になっている。この 3 つの段階の中で、一般的なプロジェクトワークと深く関わっているのは第 2・第 3 段階である。

- 1) 学生が個人の調査テーマを決める。
- 2) 各自の調査テーマに基づきアンケートシートを作成、配布、回収する。
- 3) それぞれのデータをもとにグラフを作成する。
- 4) プレゼンテーションソフトを用いて発表用のスライドを作成する。
- 5) 発表用の原稿を作成する。
- 6) 発表を行う。

なお、以上の過程を予備教育生はすべて日本語で行うが、彼等は、ごく一部の例外を除き、すべてが日本語未習生¹⁾である。

実施手順については、3 節でプロジェクトワーク実施の目的(次節)と照らし合わせた形で詳説する。

2. 目的

前節でも述べたように、本学留学生センターでプロジェクトワークを実施するのは、ただ単に予備教育生の日本語運用能力を伸ばすことだけが目的なのではない。以下にその目的の柱を 5 つ紹介する。

- 1) 大学院に入学する前に日本語による基本的なコンピューターの操作に慣れる(=コンピューターリテラシー)。
- 2) 日本人に対して、日本語でインターアクションを起こす²⁾。
- 3) 各自の専門分野の専門用語に慣れる。
- 4) 自分の伝えたいことを日本語で表現する力を養う。日本語で文章を作成する。文法・語彙・文体。日本語で口頭発表する。リズム・音・イントネーション。

¹⁾ 来日前に日本語の学習歴がまったく無い者を指す。

²⁾ 具体的には呼びかけ、聞き返し、謝辞等といった項目が挙げられる。

5) 総合的なコミュニケーション能力の向上を図る。

3. 実際の授業の流れと目的との関連性

3.1. 第1段階 (第1週～第4週)

この段階では、予備教育生に必要以上の負担をかけないように、授業自体は基本的には英語で行う。コンピューターに触れるとまず必要になる範囲のことを、実際のパソコンの画面を見ながら、すべて英語で説明する。

- ・コンピューターⁱⁱⁱの立ち上げ、終了の仕方
- ・ソフトウェア^{iv}の立ち上げ、終了の仕方
- ・日本語入力と英語入力^vの切り替え方
- ・メールアドレスの取得^{vi}

当然ながら予備教育生にはパソコン自体をまったく使ったことが無いという者(マウスや、クリックといった、いわゆるパソコン利用者なら世界共通で、あたりまえの用語をまったく理解しない者)から、英語等、日本語以外の言語でなら上手に使いこなせる者まで存在する。

この段階では日本語入力ができるようになること(資料①)を主眼にしている。プロジェクトワーク以外の日本語の授業で、ひらがな・カタカナが導入されているので、ローマ字入力を覚えることで、それぞれの文字が表す音の同異性が認識できるようになることをねらっている。

入力がある程度できるようになると、パーティーの案内(資料②、資料③)等を作成することで、フォント/色/形など、使い方のバリエーションを一通り体験させる。これには2つの狙いがある。まず、第1には、ちょっとした操作で何ができるかを体験させることで、最後の発表の際の効果的なスライド作りのヒントにさせること。ただし、あくまで体験させることが狙いであって、マスターさせる必要はない。第2に、とかく退屈になりがちな文字の練習に変化を持たせること。色が使えたり、大きさやフォントを変えられたりすることで、学習者の文字に対する興味はかなり持続する。実際、日本語の授業では文字に辟易しているような学生であっても、このタスクの時間には笑顔が絶えない。ペンではなくキーボードで文字を書くのは、慣れない形に煩わされることが少ないというのも大きな利点である。実生活の場では、名前や住所といった決まったもの以外は通常予備教育生が日本語の文字を書く機会はありませんので、キーボード入力による日本語のカナ学習を、もう少し積極的に進めたいと考えている。

ⁱⁱⁱ 使用 OS は WindowsNT。

^{iv} 使用ソフトはこの時点では Microsoft-Word2000 のみ。

^v (注：使用辞書は Microsoft-IME2000)

^{vi} Hotmail アカウントを作成させる。すでに自分のメールアドレスを持っているものはそれでもかまわない。

授業中にすべてやってしまうと、授業で指示した機能しか用いない学生が出てくるので、タスクの完成は宿題にしてメールで提出させる。こうすると授業時間外にもコンピューターを使わせられる。

3.2. 第2段階（第5週～第8週）

すでに授業で説明したり、以前の別の授業で習った日本語語彙の混ざった英語で、必要事項は説明する。授業で使用する言語は、この時点では基本的にはまだ英語である。またこの段階の最初の時点で、以前の学生が行った発表のビデオを見せ、学生にこの科目の中で目指すべきゴールのイメージを具体化させ、各自の発表テーマを決定させる。発表テーマに関して特に制限は設けず、自由にさせるが、必ず日本人を対象にして調査ができるように指導する。多くの学生は自分の専攻分野と少なからず関連のあるテーマを選ぶようである。これは専門用語を日本語で覚えるのによい機会である。

- ・ソフトウェア^{vii}の立ち上げ、終了の仕方
- ・Excelの入力の仕方。入力したデータから表を作成。
練習用データ（資料④、資料⑤）はこちらで用意しておく。
- ・PowerPointの入力の仕方。各自の出身国の紹介スライドを作成、発表（資料⑥、資料⑦）。発表は何語でも可。

3.3. 第3段階（第9週～第15週）

説明のための言語がかなり日本語に移行しつつある。具体的には日本語の構文に英単語を混ぜたような文で説明を行っている。この段階はまさにプロジェクトワークそのものである。学生の活動は多岐にわたり、なおかつそれらをすべて基本的には日本語で行わなければならないので、教師側にかなりの負担がかかる時期でもある。特にアンケートシート作成のための日本語による質問項目の作文、発表の読み原稿のための日本語作文は、クラス単位ではなく全く個人単位の活動になるため、学生の数だけ教師が必要になる。1コマ90分の授業では対応できないので、教師のオフィスアワーを利用したり、日本人の友人に助けを求めたりするように指導する。

以下がこの段階の活動の詳細である。

- 1) 各自の調査テーマに基づいて、アンケートシートを作成、配布、回収する。
- 2) それぞれのデータをもとにグラフを作成する。
- 3) プレゼンテーションソフトを用いて発表用のスライドを作成する。
- 4) 発表用の原稿を作成する。
- 5) 発表を行う。

^{vii} 使用ソフトは Microsoft-Excel2000、Microsoft-PowerPoint2000。

3.3.1. アンケートシート

これまでのコンピューターに慣れることが中心の活動では、自分で日本語を使うことがほとんどない。この活動が本格的に日本語を使う最初の段階といてよい。学生の日本語力にかなりの差がついているのがはっきりと現れる段階でもある。既習の構文や語彙を用いて、ある程度まで自分で質問項目を日本語にできる学生の場合には、彼らのレベルにおいて可能な限り自然な日本語に修正する。

学生はアンケートシートを各自の研究室、図書館、食堂、時には街角で配布、回収する。このときにはアンケート回答者の日本人との間で、日本語によるインターアクションがあると考えられるが、それがどういったものであるかは、学生一人一人について歩くわけにはいかないので記録はない。

教室内で実際の場面を想定して行われる日本語ではないので、学生にとってはモチベーションが上がると同時に、かなりのストレスもかかる。

3.3.2. グラフ作成

必要なソフトウェア^{viii}の使い方は一通り学習済みなので、わからないところはほとんど学生同士で解決できることが多い。ただし、学生同士で解決できるということは日本語によるインターアクションはほとんど望めないということの意味する。

3.3.3. スライド作成

グラフ作成同様、ソフトウェア^{ix}の使い方は一通り学習済みなので、これも学生同士で解決できることが多い。日本語によるインターアクションが少なくなってしまうというのもグラフ作成と同様である。

3.3.4. 発表原稿作成

データはすべて自分でアンケートによって集めたものであり、それをもとに実際に発表する際の原稿を作成していくので、学生のモチベーションは高く、教室で学習した構文や語彙を積極的に使用しようとする。また、未修の構文や語彙に対しても学生には抵抗感が比較的小さいのが特徴である。通常の授業でも、日本語に興味を強く示す学生やモチベーションが高い学生は、未修事項に対しても抵抗感が少ないが、それ以外の学生は学習すべき項目が多いと感じ、とにかく日本語学習に対するモチベーションが下がってしまいがちなので、目標が日本語の習得ではなく発表にあるというプロジェクトワークの設定は非常に効果的である。教師側の目標はあくまで日本語習得にあるのだが、こういった教師側のいわば目に見えない目標と、学習者側の目に見える目標が違っているという点がユニークである。

^{viii} Microsoft-Excel2000

^{ix} Microsoft-PowerPoint2000

この時期には個人指導で学生の原稿作成にあたるので、今までじっくり日本語に関する質問をする機会がなかった学生にもその機会が与えられるし、教師と学生のやり取り自体が自然なインターアクションを成立させる。また、学生の中には自分の原稿を読み上げてテープに録音してほしいという者もいる。クラスで聞く日本語のテープは、構文的にも語彙的にも学習者のレベルに合わせてコントロールされているが、自分の発表の原稿なので、授業よりもはるかに難しいものが多いにもかかわらず、かなり集中して聞き、その音を再生しようと努力するようである。

日本語以外について、これまでの指導で気になった点を一つあげておく。出身国に拠らず、論理的な思考をする訓練ができていない学生が多いように思える。集めたデータを読み、そこから一つの傾向を浮かび上がらせ、それに説明を与えるとといったプロセスをこなせる学生は少数派である。予備教育生は大学院に入学するという前提で来日していることを考えると意外である。

3.3.5. 発表

発表自体は、今のところ原稿を暗記させたりはせず、各自作成した原稿を読み上げる形をとっている。発表の際に余計な緊張を与えないようにするのだが、今後は原稿を暗記させることも検討している。せつかく時間をかけて原稿を作成しても、発表が終わった時点ですっかり頭から消えてしまう学生も多いので、原稿を覚えさせることで使える構文や語彙を定着させたいと思う。

4. 今後の課題

以上、私が担当したプロジェクトワーククラスの功罪を並べてみた。いくつか細かい課題はあろうが、現時点で一番重要なのは、プロジェクトワークの結果を発表しても、それをうまく評価する方法を開発できていないことであろう。発表という成果よりもむしろそこに至るプロセスの中でのいろいろな形での日本語学習、日本語によるインターアクションが起こることがよいのであって、そもそも評価^{*}というものはあまりなじまない物なのかもしれない。あえて評価するとしたら、発表までのプロセスで、どんな日本語に接したか、どんな日本語によるインターアクションがあったか等を、学習者個々について記録を採る必要があると思う。またいくつかの項目をチェックリストのような形で挙げて、そのそれぞれについて、まさに評価を下すという手法をとらざるを得ないだろう。

発表自体については、録画されたビデオテープを学生たちと後日に見て、それを学生にフィードバックする方法が考えられる。ただ発表の時期が15週間の

^{*} ここでいう評価とは、教師が学生の成績を評価するといったものとは少し違う。もちろんそういった要素も含まれるが、学生自身が（時には教師の助けを借りて）自分の発表を振り返ってどこがどうであったか、そしてそれが今後の日本語学習にどう生かしていくべきかを考えるといった活動を指す。

最終週に設定されている⁴⁾ため、発表が終わるともう授業がなく学生を集めにくいこと、またこれまでの日本語学習のいわば集大成という位置付けでこの発表を行うため、発表後一気に日本語学習のモチベーションが下がってしまうことが、評価を難しくしている理由の一つとして挙げられる。

5. おわりに

ここまでまったく触れていなかった(であろう)目的の5番目について、少し述べておく。目的の5番目を再録すると、「総合的なコミュニケーション能力の向上を図る」である。実は一番大きな柱でもあるのだが、そもそもわずか15週間で予備教育生に日本語の基礎を習得させるというのは無理な話である。そこで我々は、彼等がクラスで習った日本語と、個々に持つ様々な能力を用いて自分の目的(この授業の場合には、各自の研究テーマを日本語で発表すること)を達成できるかを、日本語の授業と並行して実践していると言って良い。現在は、あくまで大学院入学前の予備教育という形でしかないが、今後はこういった形の総合的なコミュニケーション教育を、日本人学生を巻き込んだ形で行ってゆきたいと考えている。

参考文献

- 足立祐子(1999) 「プロジェクトワークにおけるアドバイザーとしての教師の役割」新潟大学留学生センター紀要 第1号
- 田中幸子・猪崎保子・工藤節子(1998) 『コミュニケーション重視の学習活動 1 プロジェクトワーク』凡人社

⁴⁾日本語ゼロの状態からスタートしているために、日本語学習の進み具合とコンピューターリテラシーから出発して発表準備の時間までを考えると、今のところ15週間の最終週にしか発表会を設定できない状況にある。

1999/10/22 Computer Class

Excercise1

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつと なにぬねの
はひふへほ まみむめも や ゆ よ らりるれろ わ をん

Excercise2

アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
ハヒフヘホ マミムメモ ヤ ユ ヨ ラリルレロ ワ をん

Excercise3

はじめまして。
わたしは****です。
にいがたがいがくのりゅうがくせいです。
わたしのせんもんは****です。
どうぞよろしくおねがいします。

Excercise4

きょうはきんようびです。
きのうはもくようびです。
おとといはすいようびです。
あしたはどようびです。
あさってはにちようびです。
しあさつてはげつようびです。
きょうははれです。
きょうはいいおてんきです。
きょうもいいおてんきです。
きのうもおとともいいおてんきでした。
このテキストは3000えんです。
すこしたかいですね。

資料①

1999/10/29 Computer Class

はじめまして。わたしは****です。
新潟大学のりゅうがくせいです。
(MS P明朝 10.5p)

はじめまして。わたしは****です。
新潟大学のりゅうがくせいです。
(20p)

はじめまして。わたしは****です。
新潟大学のりゅうがくせいです。
(MS Pゴシック)

はじめまして。わたしは****です。
(斜体=イタリック)
新潟大学のりゅうがくせいです。
(いろ(色))

わたしのせんもんは****です。
(センタリングと太字=ボールド)

わたしのせんもんは****です。
(とアンダーライン(なみせん))

- わたしのへやにはベッドがあります。
 - わたしのへやにはまくらもあります。
 - わたしのへやにはつくえもあります。
 - わたしのへやにはいすがありません。
- (箇条書き)

までメールでおくってください。

資料②

クリスマスパーティーのご案内

日時: 1999年12月24日(金) 18:00~

場所: 留学生センター

参加(さんか)希望者(きぼうしゃ)は1000円くらいのプレゼントと、何か、何かを持ってきてください。

資料③

ちょうさけっか

- なんさいで けっこんしたいですか。

20~25 さい	3	31~35 さい	7
26~30 さい	19	それいじょう	1
- どんなひとと けっこんしたいですか。

① ハンサム(きれい) なひと	4	② おかねもちのひと	2
③ せいかくのいいひと	15	④ ちいのたかいひと	3
⑤ がくれきのたかいひと	3	⑥ しゅみがおなじひと	11
⑦ その他	5		
- どんなひとと けっこんしたくないですか。

① ハンサム(きれい) じゃないひと	3	② おかねもちじゃないひと	2
③ せいかくのわるいひと	13	④ ちいのひくいひと	2
⑤ がくれきのひくいひと	3	⑥ しゅみがちがうひと	12
⑦ その他	7		
- どこで けっこんしきを したいですか。

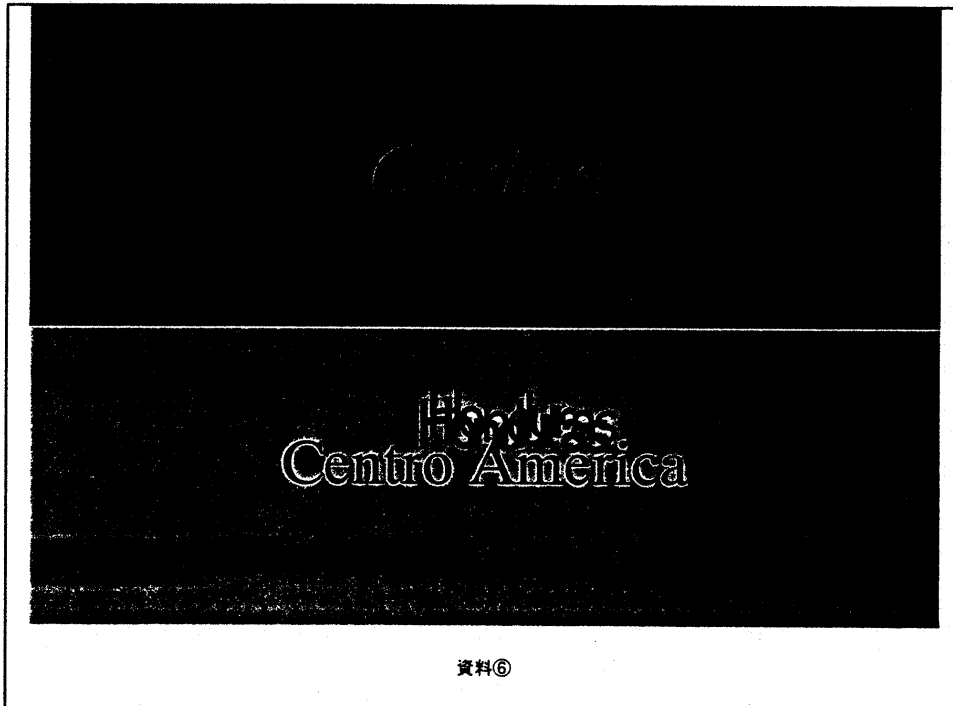
① にほんのきょうかい	9
② がいこくのきょうかい	3
③ じんじゃ	7
④ じんぜん	8

資料④

◎平成11年度学部学生入学状況
Undergraduate Student Application and Enrollment for 1999

区 分 学部別 Faculties or Schools	入学定員 Admission Capacity	入 学 志 願 者 Applicants		合格者数 Number of Successful Examinees	
		志願者数 Number of Applicants	倍 率 Rate of Competition		
人 文 学 部 Faculty of Humanities	225	1,328	5.9	253	
教育人間科学部 Faculty of Education and Human Sciences	380	2,874	7.6	442	
法 学 部 Faculty of Law	昼 間 Daytime Course	245	945	3.9	288
	夜 間 主 Evening Course	20	26	1.3	22
経済学部 Faculty of Economics	昼 間 Daytime Course	265	896	3.4	317
	夜 間 主 Evening Course	40	70	1.8	49
理 学 部 Faculty of Science	190	772	4.1	229	
医 学 部 School of Medicine	100	715	7.2	100	
歯 学 部 School of Dentistry	60	312	5.2	63	
工 学 部 Faculty of Engineering	490	1,756	3.6	556	
農 学 部 Faculty of Agriculture	162	621	3.8	189	
計 Total	2,177	10,315	4.7	2,508	

資料⑤



資料⑥

INDIAN CULTUER

- India Is Known By His Culture



資料①